

【論文】

聴覚障害者の TAT

栗村 昭子

Thematic Apperception Test of the Deaf

Akiko Awamura



2011年3月

総合福祉科学研究

Journal of Comprehensive Welfare Sciences

【論文】

聴覚障害者の TAT

栗村 昭子*

Thematic Apperception Test of the Deaf

Akiko Awamura

要 旨

本研究は、聴覚障害者の TAT 特徴について調べた。その結果、多くの健聴者とは異なる図版のとらえ方がなされたりして、平凡な反応よりも独創的な反応ともいえる独特の物語が作られる傾向が認められた。個々には聴覚障害者による特徴だけではなく、その障害もたらす生活上の制限などから生じたものと推察される特徴もあった。今後聴覚障害の被検者数を増やしさらに検討していくことが必要と考えられる。

Abstract

The present study evaluated the TAT trait of the deaf. It was observed that deaf person's narration of the themes used in the TAT was distinct from that of a normal hearing person. The deaf recognizes more original responses on the TAT than popular responses. I believe that the reason for this result was not only because the subjects were deaf, but also because they were emotionally disturbed in their lives. Further studies by investigation more number of case reports of the TAT on the deaf are necessary.

● ● ○ **Key words** 聴覚障害者の TAT 特徴 the TAT trait of the deaf / 平凡な反応 popular responses / 独創的な反応 original responses

I. 問題と目的

聴覚障害者(以下、聴障者と略す)の聞こえの問題は、外から見ただけではわかりにくい障害のゆえに、両親を含む健聴者と聴障者との間にさまざまな葛藤を生み出すということはよく知られている。このために聴障者が何らかの心理的問題を抱きやすいことは十分に理解できるにもかかわらず、日本においては本格的な心理的援助の取り組みがされ始めてまだ間がない。

聴障者に対する心理的支援については、現在のところ心理療法の領域で進展しつつあるが、それに比べて心理アセスメントの分野での援助や研究は、まだまだ不十分と言わざるを得ない。滝沢ら(2004)の調査で明らかのように、聴障者へのアセスメントは知能検査などが中心であり、本格的なパーソナリティテストはほとんどされていないのが現状であるが、そこには聴障者のことばの問題がある。聴障者のコミュニケーション手段には個人差がかなりあるために、聴障者に

受付日 2010.9.22 / 受理日 2010.11.10

* 関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授

とってまずどのコミュニケーション手段が有効かを探ることから種々の接近が始まる。口話、手話、身振り、筆談などさまざまな手段を用いての会話となるが、今の日本の現状では、聴障者が獲得しているコミュニケーション手段やコミュニケーション方法はその生い立ちや教育によってさまざまであり、それと関連する心理的問題もまた多様である。このような聴障者のパーソナリティや心理臨床的な問題などを幅広く調べるためには、一般に投映法の使用があげられよう。

投映法は質問紙法に比べると被検者の書記言語の理解に制限があっても、刺激自体や表現方法が非言語的である場合もあり、検査者は被検者とのやりとりでその反応を理解できたりすることが多い。またパーソナリティ全般にわたって深く総合的に捉えることができるという利点がある。一方、投映法の中でも筆者が検討してきたように、TAT は言語表現を物語という文脈から理解できるという点で、臨床でよく使用されるロールシャッハ・テスト（以下、ロ・テストと略す）よりも、言葉による齟齬が生じにくく、聴障者のパーソナリティ検査としてより適していると考えられる（粟村、2006, 2007, 2008）。さらに TAT にはロ・テストとは異なり、パーソナリティの構造よりも対人関係を含んだより幅広い、具体的なパーソナリティ特徴をみることができるといった利点もある。聴障者が周囲の人々をどのように認識し、どのような関係をもとうとしているのか、それが成功してきたのかなどといった実際の対人生活や態度を知るには、より適している検査法であるといえよう。

今回、ある聴障者施設において、施設利用者の特性を知るために心理検査を実施する機会を得たが、筆者が調べた限りでは、聴障者における TAT 研究はこれまでのところ報告されていないことから、聴障者特有の TAT 反応があるのかどうかについて検討も可能であると考えられる。従って、本研究の目的は、個々の聴障者のパーソナリティをとらえる以前に、聴障者の TAT 特徴や聴障者の対人関係の持ち方の特徴を調べることを含んだ基礎的な資料を得ることとする。また、対人関係においてコミュニケーションのあり方は非常に重要な意味をもつところから、本研究では TAT 施行時に幼少期（小学校就学前）の過程でのコミュニケーションの取り方について簡単な聞き取り調査も実施した。

II 方法

- (1) 調査対象者：聴障者授産施設に入所あるいは通所する聴障者6名（男性2名、女性4名）で年齢と性別は表1に示す。いずれも先天的か3歳までに聴力を失ったろう者であり、ろう学校を卒業している。また、全員コミュニケーションの手段として手話を利用する人たちであった。ところで、聴障者はコミュニケーションの障害であるために、何らかの精神的な問題を抱えやすいが、調査対象者6名はすべて神経科の受診歴があり、現在も通院中であるものの、施設での通常の作業には従事できている。また、全員が未婚であった。

表1 被検者の性別と年齢

被検者	性別	年齢
A	女性	57
B	女性	36
C	女性	65
D	女性	67
E	男性	58
F	男性	60

- (2) 調査期間：2008年7月から2009年3月までである。なお、心理検査及び面接調査は被検者自身と家族、施設の同意を得て実施した。
- (3) 調査内容：心理検査では Harvard 版 TAT を使用し、施行法は鈴木（1997）によった。男性被検者、女性被検者の使用カードは表2に示す通りで、Murray の定めたシリーズにはほぼ従っているが、3BM、8BM、9GF、12BG を男女共通で用いるのが Murray とは異なる。また、カード16は鈴木がまれにしか使用していないとしていることから、本研究でも使用しなかった。幼少期の家族観コミュニケーションのあり方についての面接は TAT 実施時に合わせて行った。以上の心理検査と面接調査は適宜休憩をはさみながら一度に実施した。

表2 使用カードとその順番

男性	1, 2, 3BM, 4, 5, 6BM, 7BM, 8BM, 9BM, 9GF, 10, 11, 12M, 13MF, 14, 15, 17BM, 18BM, 19, 20, 12BG
女性	1, 2, 3BM, 4, 5, 6GF, 7GF, 8GF, 8BM, 9GF, 10, 11, 12F, 13MF, 14, 15, 17GF, 18GF, 19, 20, 12BG

- (4) 実施形態：個別式で試行したが、心理検査・面接調査場面は被検者と検査者に手話通訳者を加えた3者で構成した。心理検査の実施にはすべ

て同じ手話通訳者が入った。手話通訳者は公的機関で専任の手話通訳者として長年働いてきたもので、技術的な水準は高い。また、本施設にもボランティアとして長年かかわっていることから、被検者の手話能力・特徴をよく知っていた。

Ⅲ. 結果と考察

投映法における反応は、一般に多くの人共通して見る反応である平凡な反応（以下、「平凡な反応」とする）と、その被検者特有の独特の反応である独創的な反応（以下、「独創的な反応」とする）に分かれる。TATの反応でも、各図版刺激が誘発しやすく、作られるのが期待されやすい出現頻度の高い物語要素と、それとは異なる被検者独自の物語要素とに分けられる。また、この前者の物語要素には平凡な陳腐な見方というだけでなく、その図版の刺激特徴を認知できるだけの情緒的・社会的発達などがその基礎になれば認知することができない、という質的な意味も含まれている。このようなわけで、TATの反応では前者の物語要素から後者のそれにわたり特徴のバリエーションが多様に存在することになる。

そこで、聴障者特有の反応があるかを検討するために、各図版に反応が一般に期待される物語内容とはかなり異なった物語が集中して生じた図版の反応について整理しまとめたものを表3に示した。

まず、最初の導入カードであるカード1については全員が楽器を認知し物語に取り込んでいた。しかし5名が「ヴァイオリン」の認知ができたが、1名は「ピアノ」と表現した。これらの反応について、それが言葉の覚え間違いによるのか認知の歪みに基づくのかについては検査上明らかにできなかった。また従来の研究では多くの健聴者（80から90%）がここで「悩んでいる」と認知するとされているが、本研究では6名のうち半数の3名しか、大半の健聴者と同様の認知はできなかった。

た。

次にカード2は、農村風景の中で畑仕事をしているような二人の男女と、若い都会風の女性が一人描かれている。ここでは三人の登場人物がいるが、前景の都会風の女性と後景の労働者風の男女が異質であると感じられることが多いために、「家族」とみなされることは少ない。しかし表3からわかるように、反応に失敗した1名を除く5名中4名までが登場人物三人を「家族」とみなしている。今回被検者となった6名は全員が健聴者の両親をもちながら、幼少期（小学校就学前）のコミュニケーションについての面接では、口話も十分には分からず、家族の中で孤立してさみしかったと答えていたことも考慮すると、このような被検者の反応については、障害を持っている被検者が自身を「家族」の中で異質であると感じているために、異質なものを含むものも「家族」と認知しやすいと考えてもよいかもしれない。

カード3BMでは、図版の登場人物に何らかの障害を持つ人と認知したものが半数にのぼり、しかも登場人物に苦悩や悲嘆を認知できたものがほとんどで（6名中5名）、中には自身の体験を語っているのではないかと思われるほどリアルな表現をするものも複数名見受けられた。全般に他のカードへの反応では、非常に表面的であったり、登場人物の表情を読み取れず期待される物語を作れないことが目立ったが、このカードに関しては、場面設定も自然で、後ろ向きに倒れこんでいる登場人物の心情に対し非常に敏感な反応がなされており、かつ感情移入の深い物語が作られている。倒れ伏している人物の姿恰好に不自然さを感じ、登場人物を身体障害者とする反応がまれに生ずるとされているが、今回の検査結果ではそれが高頻度で出現している。Bellak（1954）によれば、このような反応には語り手自身の身体像の損傷が示唆されているということだが、今回の被検者の反応には聴覚の障害という外から見てもわからない障害を負っているにもかかわらず、被検者自身の障害を登場人物に投影していること

表3 主な図版における平凡な反応と独創的な反応の出現の有無

カード	1	2	3BM			6GF	7GF	10		12F
平凡な反応	少年の悩み	3人の関係	障害の有無	苦悩・悲嘆の有無	驚きの有無	子の拒否的態度	特異な認知	悲しみの抱擁	関係の特異性	若い女性×老婆
A	なし	家族	有り	苦悩・悲嘆有り	なし	なし	友達同士	認知	男性を死体と認知	若い男性×老婆
B	有り	failure	なし	なし	有り	なし	人形を子どもの子	なし	なし	若い男性×老婆
C	なし	家族	有り	悲嘆有り	なし	なし	人形を子どもの子	なし	なし	若い女性×老婆
D	有り	家族	なし	苦悩有り	なし	有り	なし	なし	男性同士	若い男性×老婆
E	なし	家族以外	なし	苦悩・悲嘆有り	—	—	—	なし	なし	—
F	有り	家族	有り	苦悩(病苦)有り	—	—	—	なし	なし	—

が推察される。最初のカード1の男の子の悩みを読み取れたものが半数(6名中3名)しかいなかったことや、他の苦痛を認めやすいカードにおいては登場人物の感情をうまく読み取れた被検者があまりいなかったことなどを考え合わせると、障害をもつ被検者にとってカード3BMは最も同一視が生じやすいカードであったのかもしれない。この点については今後、他の身体障害をもつ人との比較研究が必要かと思われる。

一方、女性だけのカード図版である7GFは、右側の成人女性が左側の少女に何らかの働きかけをしているのに、少女はそれを受け入れていない、拒否していると解されるのが普通であるとされるカードである。少女が成人女性から顔をそむけていることがその理由といえるのだが、表3からわかるように女性被検者4名中3名までが普通に会話しているとする物語を作っている。この反応はカード図版における二人の人物の態度が対人関係の持ち方として特に不自然とは受け取られていないことを意味していると考えられる。この反応も第2カードの場合と同様、家庭の中でも孤立しがちといわれる聴覚者の対人関係のあり方を示唆しているように思われる。健聴者の90%の反応が年齢の離れたこの二人を「親子」、「メイドと雇い主の子供」などにし、比率としては後者がいくらか高いとされている。しかし、本被検者のうち、年齢の離れたこの二人を「友達関係」とし、対等の関係での物語を作成したものが1名いた。また女の子の抱えている人形のような、赤ちゃんのような部分を「赤ちゃん」としてしたもののが被検者の4名中2名いた。少女の抱きかかえているものを赤ん坊と見る人は健聴者では少数派に属することから、赤ちゃんという反応はこの被検者たちの特徴といえるかもしれない。さらに赤ちゃんを見た2名の被検者はいずれも赤ちゃんをこの少女の子供と捉えている。また、そのように答えた被検者に少女の年齢を尋ねたところ、いずれも14,5歳としている。14,5歳の少女が子供を産み抱いているという物語の設定は、かなり特殊であるといえよう。これらの反応は今日の調査における女性被検者たちの社会経験の乏しさや社会通念の薄さなどを反映しているのかもしれない。

村瀬ら(1999, 2008)が述べているように、健聴児が性の取り扱いや異性との付き合い方などといったさまざまな情報を自然に獲得していくのに比べて、聴障

者はろう学校に在学していても、これらの情報を獲得しにくいとされるが、そのような状況が上述の反応結果の背景にあるのかもしれない。さらに母子と見た3名のうち2名までが少女の拒否的な態度を見ていないことはすでに述べたが(表3, 7GF欄を参照)、内容を詳しく調べると「普通に話をしている」「母親が少女を手伝っている」などの平和な場面描写である。鈴木(1997)はこのような反応について、カード7GFでそのような場面を連想することは、母子関係における葛藤以前の、関係自体の希薄さを推測させるものであるから、最も問題を感じさせる反応であると指摘している。

女性用のカード図版である6GF、男女共通カード図版である10は、どちらも異性との関係が入ってくるカードである。女性カード6GFには、少し年上の男性に声を掛けられて若い女性が驚きの表情で振り向いている絵が示されあり、若い女性が驚いているという状況を感じなければならないとされている。この絵に対しては、4名の女性被検者中、「普通に話している」と反応したものが2名、話し掛けたそうにしている男性が女の人の好みでないから女性が怒っているとしたものが1名、また驚きを認めたものも1名いた。しかし、主人公とみられる女性の驚きを認知できた被検者は、絵の主人公である女性が男性に連れ去られて性犯罪に巻き込まれるというショッキングな結末で終わる物語を作ったが、なぜその女性が男性についていかなければならなかったのか、なぜ逃げるができなかったのかなどについて言及せず、疑問が残る物語の反応をした。この反応には男女関係の在り方について想像しにくいことが背景にあるのかもしれない。

カード10は一組の男女が抱擁しているように見られる絵で、健聴者では多くの場合、その抱擁も通常のものではなく「何らかの悲しみを背景に持つ抱擁」と見られやすいとされる。ところが今回の被検者は6名全員が二人の間に信頼関係・愛情のあるとしたものの、その内「日常の抱擁」としたのが5名、悲しみを背景に持つとしたのが1名であった。また「日常の抱擁」とした5名のうち1名は男性同士と認知し、「悲しみを背景とする抱擁」と認知できた唯一の1名は、相手を「死んでいる」とみなし、かなり特殊な状況を想定していた。これらの反応には、登場人物の微妙な表情を読み取り難いからか、非常に特殊な解釈をする傾向がある

ように感じられる。

カード10は陰影が強く、二人の登場人物の表情は曖昧であり、絵に描かれているニュアンスを読み取ることができなければ平凡的反応はしにくいともいえる。異性関係をテーマとしたカードとしてはカード4やカード13MFなどがあるが、どちらのカードも表情がはっきりと読み取れたり、状況が明快に理解できるものである。カード4は目をむいて今にも飛びだそうとしている男性を後ろから女性が引き止めているように見える絵になっており、このカード4については、表に示しては無いが、1名を除いて5名の被検者たちは、男女の拮抗を見ることができた。また、これも表に示してないが、カード13MFの裸の女性がベッドに横たわり男性がこちら側を向き腕を目に当てている、という絵に対しても、平凡的反応といえる物語を被検者たちは作っている。しかし、内容としては深みに欠け、あっさりとしたものが目立っている。たとえば、「女の人が自殺して死んでしまったので男の人が悲しんでいるが、また次の女の人を見つける」などとことなげに語られる内容になっていたりしている。従って、表面的な異性との関係は連想できるものの、男女間の微妙な関係性や心の機微などに対する感受性に乏しい反応となっている。異性愛について、社会的発達・情緒的な発達の未熟さが垣間見えるといえよう。

特殊な人物認知があったカードとしては、女性カード12Fがあげられる。これは年をとった背後の人物と若い人物の二人がこちら側を向いて並んでいる絵である。若い方が女性と見られることがほとんどであるが、女性被検者4名のうち3名までが男性とみなしていた。通常、健聴者の場合若い方を男性とする比率は10から25%ということからすると、本研究の被検者数は少ないもののかかなりの比率で男性が認知されている。絵の二人の人物の性別に関しては迷いながら決めた被検者がほとんどだったが、中には人物の大きさから「男性」としたという被検者もいた。視覚優位である聴障者特有の認知といえるかもしれない。一方、年をとった方の人物を男性（つまり老翁）と見る比率は下がり、そのように認知したものは女性被検者4名のうち1名いる。これらの反応結果については本カードの平凡的反応とされる内容では、若い女性と老婆との「相いれない敵対性。異質性」がテーマとなるはずが、登場人物の性の設定そのものが被検者全員独自なものであ

たために、内容そのものも特殊になったものと考えられる。

今回の被検者たちはいずれも神経科にかかっているが、そのTAT反応は基本的に健聴者のそれとほぼ同じであった。しかし感情の読み取りの不足や対人関係の問題を反映して健聴者のそれとは一部異なる反応出現頻度を示すところが認められた。そこで鈴木(1997)による各カードの反応内容や頻度に関する資料には、神経症、統合失調症（いずれもほとんどが入院中の患者）のそれも含まれているが、今回の被検者のTAT反応と鈴木の臨床群のそれとを比較検討した。TATで各カードに認められる反応について、出現頻度などを提示しているのは鈴木(1997)だけであるが、その目的が、具体的な出現頻度にあるのではなく、「その意図は主に、各カードで出現する多様な反応の全体像を把握するための一助としてもらうことである」としてあること、特に臨床群の被検者数は十分とはいえないことなどから、ここでは臨床群の場合は健常者群との相違をとらえるものとして参照した。本研究ではカード1の男の子に悩みなどを認知していない反応やカード7GF（女性被検者のみのカード）の成人女性の働きかけに対する少女の非受容が認められない反応、さらにカード10の二人の抱擁に悲しみが背景にあるとする反応についての各反応出現頻度で、いずれも鈴木の健常者群とは異なる臨床群の傾向とほぼ一致する結果を示した。しかし表3に上げたほとんどの反応は、今回の被検者独特のものであった。またTATは口・テスト同様鑑別診断に使用されたりするが、今回の被検者の反応では図版の特殊部分（陰影や微細部分など）への言及や病理的な意味づけは見られなかった。

本研究の通訳者は、通常の手話にも、また被検者たちのやや癖のある手話にも精通した人であった。一方、被検者たちの言語獲得は口話教育から始まり、小学校から中学校の間に行う学校で先輩から手話を学んでいた。ところで、TATでは各カードを順番に見て、それぞれのカードに対して短い物語を作ることが求められるが、検査場面では全員が筆談は使用せず手話を主として口話を副次的に用いて物語は作られた。

従って、被検者たちの手話は十分理解できたが、物語としては了解しづらいものが少なくなかった。それは物語がなかなか決まらず話が二転三転しながら話が進んでいくために、どれが主となる物語なのか判断が

つかなかったり、一つの物語なのか複数あるのかわかりにくかったりしたためである。つまり彼らの物語のまとまりをとらえることがかなり難しかったためといえる。また、物語の展開が急でそのつながり方が理解できなかつたり、信じられない展開になったりすることもあったことなどから、物語のあら筋を確認する作業が必要であった。以上のような理由から、検査者は被検者の反応に対してかなり積極的に質問をしながら検査を実施した。このような検査状況は本結果を得るうえで、多少影響を与えたかもしれないが、全被検者はこの種の心理検査を受検することが初めてであったにもかかわらず、非常に協力的に参加していた。

聴障者はコミュニケーションの障害といわれるがその障害によると思われる TAT 反応の特徴としては 12F の人物認知の特異性があげられるかもしれない。被検者たちの多くが迷いながらも二人の登場人物の性別を導き出している。聴障者は多くの場合、物事について図や絵を用いた視覚的な説明が得意である。そのような習慣から、このような特異な反応をしたことは十分考えられる。

ただ、TAT 反応におけるそのほかの特徴については、聴覚障害自体からというよりはその障害から来る二次的な障害、つまり他者とコミュニケーションが取りにくいことため情緒的な発達や異性との関係性などのような社会的な感覚の発達が阻害され、独自の反応が出てきたことが推察される。異性との関係性については、明らかメッセージを提示している絵の場合は平凡的反応ができていますが、絵に表現されているニュアンスを読み取らなければならないものでは平凡的反応が困難である場合が多かったといえる。また、母子関係の葛藤なども読み取りにくかったり、質的に異なる登場人物を同じ「家族」と認知するなど家族関係における情緒的關係について問題が感じられるものが目立ったが、それは物語を作成した被検者の幼少期からのコミュニケーションの状況によると思われた。

河崎 (2004) は、口話教育の家庭での行き過ぎは母子関係に影を落としているとしているが、そのような指摘は他の研究でも多い。口話を学ぶことは母親にも子供にも、共にかなりの時間と努力が求められ、豊かな母子関係を育む妨げになる場合もあるとされる。その一方で、自身も聴障者であり、口話教育を受けて来た脇中 (2010) は、河崎らの指摘をある程度認めなが

らも「口話か手話か」ではないとして、「これらの報告例が、『口話法の全面否定』に利用されている感が否めません。口話法そのものが『心に傷を負わせる』のではなく、別の条件が加わったときに『心に傷を負わせる』ことになると考えます」と述べ幅広いコミュニケーション教育が必要であること、また日本語獲得のためには「口話教育」が大変重要であることなどを主張しているが、勿論当事者からのこのような意見は尊重されなければならないと思う。

今回この研究の被検者たちには、精神科受診歴があり、かつ現在も治療を受けていること、また、聴障者の授産施設に少なくとも 5 年以上籍を置き、現在も入所しているか、グループホームから通うかしていること、など特別な条件がある。したがってこれらの条件が本研究に影響していることは否めない。また、比較的高い年齢の被検者が多いことも今回の TAT 反応における情緒的な感受性の乏しさに影響しているものと思われる。

しかし、これらの諸条件を考慮しても、今回の TAT カード図版に対し、多くの独創的反応が出現し、しかもそれが何らかの情緒的・社会的な発達の問題を示唆していることは、重く受け止める必要があるだろう。それは聴覚障害に起因する環境的な問題、すなわち聴障者を取り巻く環境要因のさまざまな不備・欠陥の存在を示しているともいえ、これらのさまざまな環境要因の改善の必要性を切に感じる。幼少期からコミュニケーションの障害ゆえに家族の中で孤立しやすいこと、「口話教育」の家庭でのあり方によっては母子関係などに好ましくない影響を生ずることなど、発達を阻害する多様な要因が分かってきている。新生児スクリーニングにより、聴覚障害が非常に早い時期に発見されるようになった今、障害をもった家族の支援方法や教育のあり方についても議論が起こっており、早急の対応が求められているが、心理アセスメントの分野でも実証的研究などを通してこれらの問題に貢献していくことが重要である。

今後、社会の中で自立して暮らしている聴障者の TAT 資料を集め、視覚優位である聴障者固有の反応や、現在、彼らが抱えがちな心理学的問題について検討する必要があると考える。

〈付記〉 本論文は日本ロールシャッハ学会13回大会において発表したものです。また、本研究はH20・21年度関西福祉科学大学共同研究費の助成を受けたものです。本研究に被検者として参加して下さった聴覚障害者の方がたと施設の方々に感謝申し上げます。

文献

- 栗村昭子（2006）：聴覚障害者のアセスメントに関する一考察 関西福祉科学大学紀要、9,61-66.
- 栗村昭子（2007）：TAT（主題統覚検査）についての一考察 関西福祉科学大学紀要、10,55-62.
- 栗村昭子（2008）：聴覚障害者のアセスメントに関する一考察（2）、関西福祉科学大学紀要、11,189-195.
- Bellak, L.（1954）：*The Thematic Apperception Test and the Children's Apperception Test in clinical case.* New York : Grune & Stratton.
- 河崎佳子（2004）：きこえない子の心・ことば・家族 明石書店.
- 村瀬孝子（編）（1999）：聴覚障害者の心理臨床 日本評論社
- 村瀬孝子、河崎佳子（編）（2008）：聴覚障害者の心理臨床2 日本評論社
- 鈴木睦夫（1997）：TATの世界——物語分析の実際 誠信書房 p384.
- 滝沢弘忠、河崎佳子、鳥越隆士、古賀恵理子、藤田保（2004）：聴覚障害児・者に施行される心理検査に関する調査研究 日本臨床心理学研究、22（3）, 308-313.
- 脇中起余子（2010）：聴覚障害教育 これまでとこれから——コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を中心に 北大路書房 p272.